

July27, 2020

「教室文化」とは、子どもが学級において共有している行動様式のことを言います。リーフレットでは「主体的・対話的で深い学び」実現のために、学びの土壌として、教室文化を醸成することの重要性に触れています。新学習指導要領が描く「どのような社会を作っていきたいか」を教室の中で、あるいは学級の中で実現すると考えれば、教室文化の醸成は必然とも言えます。この診断は、教室文化自体を授業と切り離して生成するものではなく、授業を通して醸成されるものであると考え、次のような視点から、教員自身が振り返る指標となるものとして作成しました。

- ✓ 他者と関わり合える環境が作られているか？
- ✓ 学習自体に向かう姿勢はできているか？
- ✓ 教室（または学習集団）の子どもの学びの文化の実態はどうか？



教室文化の醸成は授業づくりと密接な関係にあります。「主体的・対話的で深い学び」が実現している教室にはその文化が醸成されています。生徒個々の成長だけでなく、他者との協働で学びを深めながら学習課題を解決していく風土を保つために、定期的に「教室文化の診断」を活用して、現状を確認していくことが有効です。もちろん、教員自身が授業の振り返り（授業設計診断）や「教室文化の診断」を行いながら、継続した授業改善を行うことが前提で、両者の連動を意識することが大切になります。

～ 生徒による「教室文化の診断」結果から見えてきたこと ～

「教室文化の診断」を実施した研修参加者のレポートにおいて、**生徒の感じ方と教員の感じ方が一致していると思うか**の質問では、「そう思う」**29.6%**、「ややそう思う」**52.2%**と多くの教員が自身の授業集団の特徴を把握していることがうかがえる回答となりました。一方で、「一見、教室の中で安心して授業を受けていると思っていた生徒が、意外に安心して意見を言えることができていなかった」「思った以上に子どもたちは周りの人に関心を抱いていることが分かった」「同じ学習集団においても回答内容の個人差が大きく、生徒の感じ方と一致する部分とそうでない部分があった」などの回答もありました。生徒と教員自身の受け止め方は必ずしも一致するわけではないため、教員は授業を通じて日常的に生徒個々の特徴や感じ方などを細やかに捉えることが大切です。また、「**教室文化の診断**を生徒に対して行うことは、**授業改善に役立つと思うか**」の質問では、「そう思う」**40.9%**、「ややそう思う」**37.4%**と肯定的な受け止めが多くありました。教員自身が、学習集団はもちろん、生徒一人一人の特性やその成長などを振り返る機会となり、自身の授業改善につなげていこうとする姿勢が感じられました。
(令和元年度「新学習指導要領対応授業改善推進サポート研修(高)」～研修参加者レポートより～)

生徒個々がどのような思いで授業に取り組んでいるかが分かる
(A中学校)

できた時、取り組めた時、～しようとした時に、個々がうれしくなるような、前向きになる褒め言葉、認める言葉を用意しておく (A中学校)

個々に応じて、教員側も表現方法を工夫する必要がある (B高校)

発言する回数が少ない生徒や普段目立たない生徒の安心感が低い傾向にあるので、そうした点を意識したクラスづくりに取り組む必要があると感じた (B高校)

アンケート実施に御協力いただいた研究協力校の先生方の感想

生徒の隠れた意識を認識することができた (B高校)

もっと知りたい、追求したいと思えるような魅力ある学習課題の提示、生徒が達成感を感じられるような授業改善をしたい (A中学校)

自由に発言させているつもりでも、当たり前だが生徒たちのとらえ方は違う (B高校)



「教室文化の診断」生徒アンケートを実施した先生方の考察から、教室における安心感の醸成を意識することは、生徒個々の成長や学習集団としての成長や変容などを振り返るだけでなく、教員自身の授業改善によって、学校全体の教室文化の醸成にもつながっていくことが期待できます。自らの担当授業や対象となる集団を振り返り、各学校や各教員で行っている授業アンケート等と併せて、「教室文化の診断」を活用することで、新たな気付きの参考になればと考えます。

サポートブック(P160)「教室文化の醸成」もあわせて御活用ください! (今回は教育相談課が担当しました)